

ジモトで座談会～市長と明日のまちを考えよう～ 神林地区 報告書

1 開催日時等

- (1) 日 時 令和7年2月12日（水）午後6時～8時
- (2) 場 所 川東公民館（神林232-1）
- (3) テーマ 「信州まつもと空港の活性化と地元振興」
- (4) 参加者 20人 臥雲市長・交通部長・産業振興部長・建設部長
空港対策委員会委員（町会長含む）16人
- (5) 傍聴者 一般傍聴者6人、市関係者7人

2 次第

- (1) 開会
- (2) 臥雲市長あいさつ
- (3) 地区代表者あいさつ
- (4) 参加者紹介
- (5) 懇談会
 - ア ジェット化30年を振り返って
 - イ 空港アンケートについて
 - ウ 直下3町会から
川東・寺家・南荒井
 - エ 地元振興について
- (6) 閉会



3 開催趣旨

信州まつもと空港地元4地区（今井・笹賀・和田・神林）では、FDA定期便1日当たりの離発着回数の変更（12回→20回）について、協定書の規定に基づいた長野県との協議を行っています。

神林地区空港対策特別委員会では、協議同意に向けて、地区内の住民・町会・関係団体等から意見を集約し、令和6年12月19日付で、神林地区要望書を提出したところです。

また、昨年10月には、地区で空港に関するアンケートを実施し、地区住民の利用状況や、ご意見・要望など、住民の声を幅広く調査しました。

本座談会は、神林地区は離着陸空路直下にあり、北側滑走路の使用率が80%を超える状況の中、ジェット化以来30年1年365日、常に騒音と万が一の危険に晒されている地域であるという特別な事情と、安心安全な生活を望む地元住民の想いを伝えるため、開催しました。

4 懇談要旨

ア ジェット化30年を振り返って【百瀬委員長】

○神林地区と空港の歴史

- ・旧陸軍飛行場は、軍が終戦直前の昭和18年に建設を決議、昭和20年に開港し、同年に終戦を迎えた。もし開港が前倒しになっていたら、若しくは終戦まで長引いていたら、直下の地域は空爆を受けていた可能性もある。当時の神林地区住民は、不安に苛まれて眠れない日が続いたのではないかと想像する。
- ・私が中学校の頃は、旧飛行場の残骸が残っており、そんな中を通学した記憶がある。
- ・昭和40年の新松本空港開港に向けて、当時の降旗市長と地元は協定を結んだ、その三原則というのが、「拡張しない・ジェット化しない・軍事化しない」であった。
- ・過去の陸軍飛行場直下という歴史を背負った住民の思いが、「軍事化しない」の文言に凝縮されている。騒音や万一の事故に対しての思いが、60年前から地元住民にはつきまとっている。

○空港のジェット化と反対運動、協定調印

- ・昭和57年には、YS11大阪便の完全通年飛行から、YS11の製造廃止という時代の趨勢から松本空港ジェット化の方針が出された。
- ・2000メートル以上の空港計画が示されてから、反対運動が盛り上がり、一部地域は裁判を起こすような事態となった。
- ・平成元年のジェット化協定調印に向けて、空港周辺整備対策事業により、公民館等地区内公共施設の建設や、農業の基盤整備事業など、ありとあらゆる要望事項を地元振興のために果たしていただいた。

○ジェット化開港、JAL撤退～FDA就航～神戸便

- ・平成6年ジェット化以来、路線拡充と廃便を繰り返しながら、22年のJAL撤退とFDA就航があり、令和元年からの神戸便新規就航により勢いのある流れになった。
- ・地元としても空港活性化のために協力できることはしっかりしたいと進めてきた。

○終戦80年、開港60年、ジェット化30年、地元の思い

- ・空港の歴史とともに神林の歴史がある。空港と向き合ってきた80年の歴史が、「だから神林は特別なんだ」という思いがある。
- ・是非この機会に、長い歴史、地元の思いに寄り添ってやっていただきたく、神林の歩みをお話した。

【臥雲市長】

- ・日本陸軍が終戦直前に開港した飛行場であるということ、空襲の対象となった可能性もあったというお話が、神林地区と空港との向き合い方の原点にあるということに改めて心に刻まなければならない。他の地区とは違うということの意味も共有して、この問題と向き合っていきたい。

イ 空港アンケートについて

○空港の利用状況や騒音に対する住民の意識調査

- ・実施期間 令和6年10月1日～31日
- ・実施方法 広報10/1号にあわせて全戸配付(1,157部) Web(Logoフォーム)掲載

・回答数 853 件（うち Web は 54 件あり）

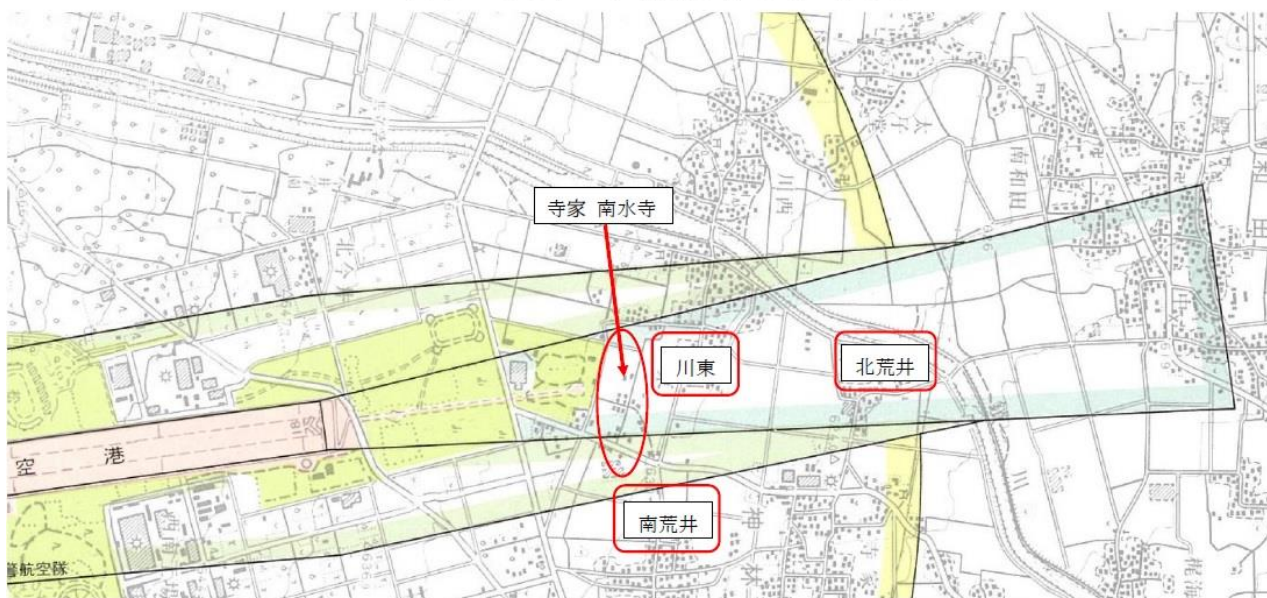
・回答率 73.7%

○騒音や増便に対する町会による意識の差がみられた

神林 7 町会（川西、川東、寺家、南荒井、町神、下神、梶海渡）

直下 3 町会（川東、寺家、南荒井）

松本空港管理事務所管内図 拡大



ウ 直下 3 町会から

【川東町会：古畑副委員長】

○地域の変遷

・昭和 44 年当時は、道路は未舗装で穴ぼこだらけ、街灯もまばらで夜は出かけるのも怖いくらいであった。

・昭和 53 年やまびこ国体、そのあたりから、競技場ができたり、環状高家線が開通されたり、工場団地もできたりと、様子が一変して開けてきた。

○空路直下であることとその利便性

・滑走路北側からのアクセスが 80%を超える状況の中、地区住民は毎日、一年 365 日、騒音と事故の不安を抱えて、我慢の生活を送っていることは理解していただきたい。

・反面、空港が近くて非常に利便性は良い。空港活性化に対しては決して反対ではありません。

○町内を二分した反対運動

・ジェット化当時、町内は条件付き賛成派と絶対反対派に分かれ、一つの常会が絶対反対で挙句の果てには裁判にまでなった。

・そのわだかまりから、役員は引き受けない、町会行事には参加しないなど、一常会が孤立した状態が長く続いた。

・当時反対の立場の中では、他町会のように、要望条件としての話を持ち出せず、分館建設は叶わなかった。

・今回の 20 便に対する要望事項の中で、距離的にも心理的にも遠く離れた常会の分館建

設ができれば、町会活動にも大きく弾みがつく、是非この機会に強く望みたい。

○防音対策への住民の不満

- ・境界線の線引き一本で行われた防音対策工事については、未だに空港関連の話になると不満の声がでる。線引き一本で差がつくのは、納得がいかない。

○要望事項の未完了

- ・ジェット化当時の要望事項は概ね済んでいるが、未だ完了できていない案件がある。約束した案件は速やかに進めていただきたい。

○ストレスなく生活できる権利

- ・20便に増便すれば、危険度も増すわけで、非常に心配している、毎日苦しい思いをしている住民がいることを忘れてほしくない。住民がストレスなく生活できる権利はあると思う。
- ・要望事項が達成されたとしても、騒音からは逃れられない、条件を整えたからそれでいいじゃないかという考え方は改めてほしいと思う

【寺家町会：藤澤代表委員】

○騒音対策

- ・ジェット化当時、一定の空港周辺住宅に騒音防止として、二重サッシ、エアコン設置されたが、故障した場合の機能回復事業について、県サイドの話になるが、見直しを提案したい。

○地元住民に対する運賃の割引

- ・アンケート回答者6割が利用、地元は結構乗っている。

○騒音測定

- ・着陸時は、我が家の2階から、パイロットの顔が見えるほど低空なので、騒音とともに怖さを感じる、空路の直線上にある全戸を対象として、特に天気の悪い時に騒音測定をしてみたい。

○空港の国際化と商業化

- ・増加する外国人観光客への対応と、羽田空港のように商業施設を充実させて、飛行機に乗るだけではない、賑わいを創出してほしい。

○空港アクセス、インフラ整備

- ・松本駅、上高地へのアクセスは不便な現状である、未来に向けて空港を中心とした県内交通網について大きな構想をもって進めていただきたい。

【南荒井町会：藤牧副委員長】

○長野県の姿勢

- ・多くの方々のご苦労によって今の空港があり地域があるが、30年経つと住民アンケートにあるように、騒音にも慣れ、空港対策への関心も薄れ、空港対策委員会委員としての役割に虚しさを感じてしまう。
- ・県も調印当時を知らない職員が次々に新たな提案を持ち込んでくる。一度印鑑をついてしまえば一方的で、地域からの要望に対しては、過去に地域補償として何億も使ったとか、騒音基準値内であればあと何便まで飛ぶのが可能だといった説明で、あまりにも無神経だなというふうに思わざるを得ない。

- ・就航率も順調でその経済効果が 200 億円を超えるというような説明が、長野県からあったが、地域支援には消極的で、他市町村との公平性が取れない、保たれないというのが本音にあるのではないか。
- ・空港直下の地域の状況や住民の抱えている不安を広く県民の皆さんにもご理解いただいて、当たり前の地域支援がされるべきではないか。

○事故のリスク

- ・便数が多くなればなるほど、事故の確率が高くなるのは当然のことであり、標高の一番高い、日本一空に近い空港で、周囲を山に囲まれて、離着陸が難しいという話をパイロットから聞いてきた。
- ・昨今の海外での航空事故を見聞きするにつけ、どこの空港でも起こり得る事故として、一層危機感を強くしている。万が一の事故に対して危機意識を持ってどんな対策をしているか、地域に説明していただくことで少しでも不安を和らげることになる。

○公民館補助事業の見直し

- ・市長が島内地区並みに公民館補助を見直したことに感謝申し上げる。それに対して県が相乗りしている形になっていることが不満である。県は地元負担分を全額負担してもいいのではないか。
- ・2 年任期である神林の町会役員が、公民館の建設まではなかなか出来ない。公民館は有事の際の避難所としても重要であり、整備は急務であるので、できれば市のお力をお借りしたい。

○災害マニュアル

- ・市では、いろんな災害マニュアルがあるが、地震や水害だけではなく、航空機の事故による災害の対策、例えば、消防署の消火剤の準備状況だとか、果たして現消防署が空港直下の位置であることが適切なのかどうかとか、マニュアルとともに整備が必要ではないかと思う。

【臥雲市長】

(川東)

- ・住民がストレスなく生活できる権利という一番根本のお話は、振興策をすればそれでいいじゃないか、という非常にビジネスライクな話にならないように、忘れてはいけないこと。今回の大きな節目で、もう一度しっかりと胸に刻んで、重く受け止めさせていただいた。
- ・約束した案件がまだ残っている、残しながら次の話にはいけないという皆さんのお気持ちをこの 2、3 年で受けて取り組んできたつもりだが、十分ではないというところは、反省をしなければいけない。
- ・線引きの問題という極めて難しい話も、真摯な話し合いをしていきたい。
- ・具体的な話があった、川東公民館の北荒井常会への分館建設については、その事情を十分斟酌して、しっかりテーブルにのせて協議をしたい。

(寺家)

- ・騒音対策については、地元の皆さんの立場に立って県側にしっかり要望することに努めてまいりたい。

- ・利用料の補助制度については、搭乗率も高くなり、便利な路線になる中で、どのようなスキームでできるかということを考えていく時期になるかなと思う。
 - ・騒音測定については、騒音調査はやっているという行政側の認識と、地元の皆さんが本当の実態を把握できていないんじゃないかという乖離を埋めなければ、地元の理解を得ての増便には進んでいけないと思う。
 - ・便数や路線の拡充が進み、空港への需要がトータルで高まれば、商業施設に対しての民間投資であるとか、空港をハブとした県内交通網の大きな構想というものが視野に入ってくるだろうと思う。
- (南荒井)
- ・長野県のスタンスが、空港だけに特化するわけにはいかないという基本姿勢が見え隠れしているという指摘でしたが、少なくとも今、長野県政の中の空港は教育と並ぶ二本柱として阿部知事は位置づけて取り組もうとしていると思う。全県的な問題として、空港機能強化への予算がつくようになった。
 - ・空港は長野県民全体が大きな恩恵を受ける話であり、他の公共事業と同一に論ずるものでない、空港問題は特別扱いしていい、特別枠で対応すべき話だということを県側に伝えていかなければいけない。
 - ・公民館補助については、松本市の枠を島内と同じように引き上げたのは、あくまでも松本市の対応であって、そこに今度は県としてどういうスタンスをとるのかと、これは別に考えて結果的に足し合わせるといった理屈立ては、本来我々もしっかり考えていい論点だと思う。
 - ・地元の皆さんだけでなく、松本市全域を考えても、地震や豪雨災害などと同列に航空機事故というものを危機管理の対象とすることは、今抜け落ちている部分だと思う。

Ⅱ 地元振興について【上條相談役】

○騒音について

- ・騒音の話は、数値でお話ししても、体験しないとなかなか理解していただきにくい話である。是非一度体験、体感していただければありがたい。

○行政の対応姿勢

- ・川東公民館補助金の例を一つとってみても、多事争論会での「空港は騒音に悩む地元にとっては迷惑施設の何物でもない、松本市としては島内並みの対応を考えていきたい」という、市長の姿勢が庁内に浸透していないのではないかな。

○土地利用について

- ・アルウィン西側の産業団地については、具体化されて感謝申し上げる。デリシア神林店の移転については、知恵を出していただいているが、なかなか進まない。

○予算項目に地域振興費

- ・地元4地区の中で、一番騒音の影響が強い神林に対して地域振興費のようなものがあるのもいいのではないかな。

○新たな定期的な懇談の場

- ・島内のように、地元の生の声を聴く、このような機会を毎年定例的にやっていただきたい。

【臥雲市長】

- ・都市計画の件は、なかなか突破できないでいることは、私自身も忸怩たる思いで、大変申し訳ない状況で、時間がかかってしまっていることをまずお詫びをして、我々が汗をかかなきゃいけない部分だと思っている。
- ・空港の問題は、ボトムアップでは駄目だと思う。予算を含めた特別枠というような考え方をトップダウンでつくる必要がある。令和 8 年度の総合戦略局のmatterとして、しっかり実現に向けた協議をしたい。
- ・地元の皆さんと市長をはじめとした関係幹部との定期的な意見交換の場については、是非行う方向で調整をしたい。

まとめ**【藤牧連合会長】**

耳の痛いようなことも、何度か申し上げた経過もあるが、それに心よく、また真摯に受け止め、返答を返していただいたことに感謝申し上げます。また定例会という、地元住民の意見を吸い上げる、そういった機会を設けていただける、そんな環境が整ってきたのではないかなと思う。地元地域に寄り添ってくれる姿勢を伺い、我々もそれをしっかり感じられた、誠に感謝申し上げます。

【臥雲市長】

限られた時間ではあったが、昭和 20 年前後の歴史から、ジェット化以降の経緯、そしてその間、皆様方が感じていた思いとそれと我々ができたこと、できなかったこと、そうしたことを一つ一つ胸に刻めた時間ではなかったかというふうに思う。